

ともに暮らす。 ともに生きる。

たばた
じゅほう
田畑 珠鳳 さん

「石川郡石川町」



しなやかな感性と木の温もり
人形達の優しい表情は、
作り手の心そのもの



イチイは、年月を経るに従い、チョコレート色に変化する。自然のツヤを増し、味わい深い作品に成長する



愛らしい表情の「式部雛」。全国から注文が寄せられる

石川町の木彫師
和泉式部伝説にちなんだ「式部雛」は
石川町を代表する工芸品でもある



「一位彫は、どの作業も他人に任せることができない。造形(デザイン)が一番神経を使う作業ですね。木彫師の仕事だけで生計を立てることができるのは幸せです。今後は、自分の作りたい物を作り続けることができれば、もっと幸せ」

イチイという樹をご存じだろうか。沖縄を除く日本各地に自生する樹木で、特に寒冷地帯に群生する。高さ20mほどの高木になるが成長は遅い。イチイを用いた工芸品として有名なものに、飛騨高山の伝統工芸品「二位二刀彫」がある。その二位二刀彫の第一人者であった村山群鳳師に学び、厳しい修行の末に独自の一位彫を確立したのが、石川町の木彫師、田畑珠鳳(本名 田畑剛)さん。

田畑さんは、東京生まれ。お母様の郷里である石川町に疎開、幼少期を過ごし、中学三年生で帰京。都内の高校を卒業後、印刷会社就職するが、デザインの勉強を志し退社。進学先は、デザイン教育のバイオニア「桑沢デザイン研究所」だった。グラフィックデザインを基礎から学び、当時新鋭イラストレーターとして活躍中だった久里洋二や真鍋博の事務所アルバイトを重ね、実践力も身に付けた。卒業後は、外資系会社のデザイン企画室に勤務。デザイナーを目指す人が聞いたら、うらやましい限りの経歴だ。

しかし、「商業デザインはある意味妥協の連続。全てを自分一人で行ってみたい。体が動く限り、生涯現役でありたい」と、木彫師の道を選ぶ。この時、田畑さん30歳。何度も飛騨高山へ足を運んで弟子入りを懇願。ようやく実現した修行は、途中で何人も辞めていくほどの厳しさだったという。7年間の修行を含め、足かけ15年の高山生活の後に石川町へ移住し、一位彫りを生業とする生活をスタートさせた。

「作家ではなく、木彫り職人です」と笑みを浮かべる田畑さん。粘土で、大きさ・厚み・高さを確認しながらデザインし、型紙をとって木取りという作業に移る。干支の動物、面、七福神、雛人形、茶道具などを主に手がけているが、「仏像制作は、一番心が落ち着く」そう。「難しい作業が楽しい、手間がかかるほど楽しい」と田畑さんは言う。丸みのあるフォルム、丁寧に白ろうで仕上げたツヤ、穏やかでやさしげな表情が田畑さんの作品の持ち味だ。